



国際ロータリー第2790地区

千葉南ロータリークラブ会報

THE ROTARY CLUB OF CHIBA SOUTH

創立 1964年3月2日

例会日 毎金曜日 12時30分

例会場 オークラ千葉ホテル

会長 鈴木 美津江

幹事 杉本 峰康

会報委員長 村田 紀之

〈事務局〉 〒260-0027 千葉市中央区新田町1-2-1 トーシン千葉ビル7階

(☎ 043-245-3204)

2013年1月第2週号

第2388回



平成25年1月18日(金) 点鐘12:30 (晴れ)

☀️ ロータリーソング 『我等の生業』

☀️ 四つのテスト ～言行はこれに照らしてから～

1. 真実か どうか
2. みんなに公平か
3. 好意と友情を深めるか
4. みんなのためになるか どうか

■お客様紹介

•本日のゲストスピーカー—
国際ロータリー第2790地区
パストガバナー 齊藤 博様

■会長挨拶及び報告 鈴木 美津江会長

先日の雪には驚かされましたが、皆様いかがでしたでしょうか・・・

本日は、市原RCより齊藤パストガバナーにお出で頂き、職業奉仕についてのお話を伺いながら勉強をさせていただきたいと思っております。そして、ロータリーに入会した意義、今後の活動について、もう一度考え直す良い機会だと思いますので、ご清聴のほど、宜しくお願い申し上げます。

■入会式

江沢一男会員 (京葉臨海通運(株) 常務取締役)

紹介者:伊藤和夫会員

先ほどご紹介いただきましたように、私は、ローターアクト会員時代にロータリークラブの皆様大変お世話になりました。今回、伊藤さんから声を掛けていただきましたが、今ある立場は、ロータリークラブとローターアクトメンバーのお蔭だと常々感謝しております。昔の恩返しが少しでも出来ればと思っております。微力ではありますが、今後も頑張りたいと思っておりますので宜しくお願い申し上げます。



■幹事報告 植松 省自副幹事

・次週の例会は、懇親夜例会です。

点鐘:午後6時 場所:ふぐ料理「生乃弥」

■ニコニコボックス報告

★鈴木 美津江会長、杉本 峰康幹事

皆様、こんにちは。毎日寒い日が続きます。お体にはお気を付け下さいませ。

齊藤先生、本日は有難うございます。宜しくお願ひ致します。

江沢様、本日はご入会おめでとうございませ。これから宜しくお願ひ申し上げます。

★伊藤 和夫会員

皆様、こんにちは！今日は、私の千葉ローターアクト時代のメンバーのひとりの江沢一男さんが当クラブの会員として入会されることになりました。38年来の友人です。宜しくお願ひ致します。ロータリアンとしてのご活躍を期待しております。お互いに頑張りましょう。

★竹尾 白会員

ようやく長男に初孫が生まれました。7年目です。名前は侑真(ゆうま)です。

本日のニコニコボックス	5,000 円	累計	420,000 円
金の箱	440 円	累計	8,322 円

■出席報告 (会員数41名)

出席者数29	欠席者数12	ピンター 1	修正出席率 次回にて
--------	--------	--------	------------

千葉市内例会変更のご案内 [メニュー](#)にご利用下さい。

千葉RC	月	2/18	三井ガーデンホテル千葉
千葉西RC	火	2/12	センシティブ「東天紅」
千葉幕張RC	火	2/5・2/12	アパホテル&リゾート東京ベイ
新千葉RC	水	2/13	京成ホテルミラマレ
千葉北RC	水	2/13	ホテルポートプラザちば
千葉中央RC	木	2/14・2/21	三井ガーデンホテル千葉
千葉港RC	木		京成ホテルミラマレ

ロータリーを知る会

演題 ⇒ 『職業奉仕について』

卓話者⇒ 国際ロータリー第2790地区
パストガバナー 齊藤 博様



みなさん、こんにちは。

職業奉仕の話ですが、こんな話が「奉仕こそ我がつとめ」という本の中に載っております。

紙屋の主人がつくづくと自分の前半生を顧みて、こう呟いた。「自分は二代目として紙屋を受け継いだのだが、どう考えてもこれは賤業だ。やっていて面白くないし、利益も少ない。いっそ廃業してしまおうか」と。しかし、ある朝、街を歩いているとき、ふとこういう気になった。「人々はうちの紙に包んでパンを家に持ち帰り、それを毎日食べる。もし、うちの紙がなかったとしたら、どんなに不衛生だろう。ということは、うちの紙のお陰で清潔なパンが食卓にのぼり、人々は心安らかに一日を健康に働くことができるのだ。」こう考えた時に、彼は胸を張って自分の仕事に邁進することが出来るようになったというのです。

パンを清潔に届ける仕事は、人間を健やかに育てるお手伝いをしていることになり、神の思し召しに適う訳ですから、紙屋が己の仕事(職業)に誇りを持つのは当然であります。

これは実は職業奉仕と呼ばれる生活態度であって、こういう職人を育てるのがロータリー運動の目標なのであります。職業によって社会に奉仕し、職業的モラルを高揚し、これを社会や仕事場に反映させ、ひいては世界に広めて行く、それが我々の使命であります。

職業奉仕という言葉は 1927 年に出てまいります。1911 年にオレゴン州のポートランドで開かれた第二回全米大会に、アーサー・フレデリック・フェルドンは会議に自ら出席することが出来なかったため、シカゴのロータリアンにメッセージを託し、これが大会で読み上げられました。

「経営の科学とは、奉仕の科学を言う。即ち、奉仕に徹するものに最大の利益有り。He Profits Most Who Serves Best.」先に少々解説申し上げますと、He Profits を 1 なる数値にする。Serves の世界を 1 なるものと考えます。経営の心の状態が数値で 1 しかないと考えたら、心が 1 であるから自分の行動も 1 の制約を受けますから、その 1 なる力でいくらあくせく行動しても、得られる利益は 1 しか得られない。心の質を 2 に良質化すると、不思議と 1 だった行動の主体 He Profits が 2 になる。そうすると 2 の思考で会社管理をやった人は、結末として自分の取り分は 2 とならざるを得ないのではないかと。精神機能というものを根底において、精神機能を良質化することによって、その心で実業にいそめば、その精神の改善の部分だけ、利潤が上がってくる。こういう考えなんでございます。

従って、職業奉仕とはどういうことかご理解頂けるわけで、職業奉仕とは二層構造を持っておりまして、一つは企業管理です。ものを仕入れて売る、それだけでは駄目だ。それをマネージする自分の心を人間的に浄化していく。この努力を失うと破滅することがあるぞと云うことでもあります。

シェルドンは続けて「いかなる制度にもあれ事の成否は、一にかかって奉仕の実践者の総和如何による。広い意味において人は皆セールスマン、即ち一人一人が労働か、または商品であるかの別だけのことで、他者に対して売るべきものを皆持っている。人生の成功は、単なる幸運や偶然性のお陰によるものではなくて、自然の法、即ち、精神的、倫理的、身体的および高次の精神的法の支配に服するものであって、法の命ずるところに従って行動すれば、成功を勝ちうることに必定である。天地の理法森羅万象の背後に、普遍的思想があることの認識を深くすること、人類連帯の自覚、万物掃一、人類皆同胞の自覚のことであって、この次元に立てば、企業の場合であるか否にかかわらず、奉仕に徹するものに最大の利益有りということの本体を会得することが出来るのである。」と読み上げました。

シェルドンのものの考え方というのは、要するに、「人間の体の中に魂がある。魂は浄化されることを通じて、人間の行動の質を高めていく。その行動の中に企業経営が含まれている訳であります。単なる利潤獲得の目的のために企業経営をしてはならない。魂の浄化によって支えられた範囲内において企業を管理し、相互契約によって金銭が授受されるわけであるが、その金銭の中に「浄化された魂の投下」というものがなければならない。金(かね)金・金に流れる人生には、地獄がある。必ず魂の浄化を企業に移して、企業管理を行うのだ。」と云うのであります。

経営者は自分の人格を形成し、企業の経営を奉仕の心で運営することで、更に昇華して道徳基準を高めていく。そして職業を通じて社会に奉仕する。職業倫理の高揚、これが職業奉仕の意味するところでございます。

こういう訳で職業奉仕は単純明快、決してわかりにくいものではございません。

「ロータリーが職業倫理をやかましく言うのはわかるが、この厳しい経済界で、そんな綺麗事で事業が出来るだろうか。」と思われる方もおられると思います。これに対しては「四つのテスト」というロータリアンなら誰でも知っている標語がございまして。

1、真実かどうか 2、みんなに公平か 3、好意と友情を深めるか 4、みんなのためになるかどうか

ここで言うみんなとは、広く社会を指しております。これこそ事業成功の秘訣でありまして、かつまた実証されたものなのでございます。作者はハーバード・テイラーですが、1932 年アメリカの経済パニックの中にあつて、あるアルミニウム食器の製造会社が倒産寸前の会社を債権者の依頼を受けて、この会社の再建に取り組むことになりました。このどん底状態から抜く出すためには、全社員が極めて倫理的な立場を取ることと同時に、社長と社員の心が同一になるような管理運営できれば、この再建は上手く運

ぶと考えました。そこで彼は6週間、沈思熟考の末に編み出したのが、この「四つのテスト」であります。その結果、当初 6000ドルあった借入金も 10 年後には全額返済し、株主には 100ドルの配当も出せるようになりました。

その後 1954 年にテラーが国際ロータリー会長に就任した時、職業人の行動規範にもなるものと考え、これを国際ロータリーの標語として版權を委譲しました。これが契機となってロータリーの世界に浸透していったのであります。勿論これは会社経営ばかりでなく、我々の日常生活にも適応されるものでございまして、ロータリー運動の理念がよく盛り込まれているとして、過去 40 年間奉仕の心を植え付け育てるのに用いられてきました。が、これは国際大会の承認をえておりません。あくまでも、個人の提唱するターゲットと同じであります。(1943 年 RI 理事会は採用を決定)

そして、全てのロータリーの思想と同一であるかどうかということについては、いささか問題がございます。ロータリーの一部を示すものであって、全部を示すものではないのであります。

如何なる場合に適応するかというと、同一社会の人の和を得るためには非常によい。同じ性質の社会、例えば会社のように全員が利潤を追求する社会、こういう場合には最も適切であります。しかし、異質の社会の人の和を繋げることは出来ません。

具体的内容について考えますと、四つのテストを二つに分けて考える。一つは1、真実かどうか。今一つは2~4であって、1が言動そのものの内容、2~4はその言動が述べられるべき状況に関して、類別する基準が示されております。ロータリアンの言動は必ず真実でなければならない。真実の上のみ、人と人との信頼関係が成り立つ。しかし、真実の言動のうち、これを実行するか否かは、2~4の基準により分類検討を加えた上で行われなくてはならない。すなわち 1 は、ロータリアンの言動は真実かどうか。2~4は真実を語ることが、皆の公平になるかどうか。真実を語ることによって、人間関係が損なわれる場合は、真実を語らない方がよいぞ、というわけです。

例えばここに胃がんの患者さんがおられたとします。この場合、2~4の準則の命ずるところによって、貴方は胃がんですよとは言わないでしょう。だがしかし、何も言わないことが相手に不吉な予感を与え、「何も教えてくれないようですが、私はがんではないのですか。」と訊ねられた時に一体どう対応すべきか。「いいえ、あなたはがんではありません。ごく普通の病気ですよ。」と言えば、真実に反することになります。死に赴く人の姿に対して、生者の精神衛生を管理する世界、この世界は異質の世界でありまして、「四つのテスト」によって人の輪を作ることにはできないのであります。

今一つ、職業奉仕は職業を通じて社会に貢献することだ、と手続き要覧には書いてありますが、例えば、弁護士が無料奉仕相談を企画する、医者が無医村に行って診察行為をする。これは職業を通じて社会奉仕をしているわけですが、職業奉仕かという、これは実は社会奉仕であります。そこで、職業奉仕と社会奉仕を分ける基準はどこかと申しますと、それは受益者、その奉仕の実

践によって利益を受ける人がロータリアン以外の場合には社会奉仕、ロータリアンが受益者になる場合、これを職業奉仕というのであります。

もともと職業奉仕というのは、クラブでいろんな発想を交換して、そこで得たものを自分の企業に持ち帰って企業反映の糧とした。ということは、自分の企業が栄えることですから、ロータリアン自身が受益者になります。

それからロータリアン以外の世の中の人たちに利益になるもの、これが社会奉仕。したがってある一つのことが、職業奉仕になるのか社会奉仕になるのか。その基準は受益者が誰かということをもいつも考えておけばよろしい訳であります。

そこでクラブで、職業奉仕委員会の事業計画として行われているところの優良従業員の表彰。これは職業奉仕委員会が企画立案しているクラブが多いのですが、優良従業員というロータリアン以外の方が表彰を受けて受益者となる訳ですから、これは原理的には社会奉仕委員会が管轄しなければならない。しかし、ロータリアンの受益は全然ないかというともそうでもない。例えば、ある社員が表彰を受けます。そうするとその同僚も奮起する、企業の実績も上がってくる。企業が繁栄すれば、受益者となるのはロータリアン自身であります。従って正確に申しますと、優良従業員の表彰というのは職業奉仕20%、社会奉仕80%である。それでは社会奉仕委員会が管轄するのは間違っているかという、それはどちらでもよろしいのですが、原理的に頭の中で整理する時には、受益者がロータリアン以外ならば社会奉仕、ロータリアン自身が受益者となるのは職業奉仕となるんだ、というふうに分けていけばわかりよいと思います。

私はかねてからの新会員のために、マニュアル以外のそれとは違った視点からロータリーを説くもの、例えば、イソップ物語の寓話からロータリーの思想や組織を考えることはできないかなー、と考えておりました。その試みで、これからお話し上げるわけですが、新しい会員の皆様が少しでもロータリアンとしての素養を身につけられ、ロータリーが少しでも親しみ高まることを祈るものでございます。

<第一話>

郊外からパリに向かって一台の馬車が走っていました。村の辻に二人の少年が立っていて手を上げました。「おじさん、パリに行くの」「そうだよ」「弟を乗せてやって」「いいよ」

馬車はまた砂埃をあげながら走っていきます。しばらくして乗客が馬車の後ろを見ますと、砂埃の中を先ほどの少年が真っ赤な顔をして、歯を食いしばり、懸命に走ってきているのを見ました。「さっきの少年だよ。お前さんの兄さんだろう。どこまで走っていくんだ。」「うん、パリまでだよ」パリまではまだ 4 キロもあるでしょう。乗客は不審に思って、なぜ乗らないのかと尋ねました。「お父さんが死んだから金がないんだ。お前は小さいから馬車に乗れ、兄ちゃんは強いから、走ってついて行くんだ。」

乗客は顔を見合わせました。

「何しに行くんだい」「お母さんに会いに行くんだ」「お

母さんはパリにいるの」「うん皿洗いをしているんだ」

乗客はお互いに顔を見合わせながら、誰言うとなしに帽子を回してお金を集めました。

「おーい、馬車を止めてくれ」ギーッという音を立てて馬車は止まりました。「可哀想な子供だよ。お父さんを亡くしてお母さんに会いにパリに行くんだ。乗せてやってくれ」

御者のおじさんは後ろを振り返って「そうだと分かっているや、早く乗せてやったのに」と、にっこり笑って少年を乗せました。乗客がお金を渡そうとすると、御者は「いや、その金は貰えないよ。子供たちにやってくれ」

乗客は皆ににっこり笑って頷いて、少年に渡しました。「おじさん、おばさん、ありがとう」馬車は何事もなかったようにパリへと走っていきました。

兄も乗客も御者も全て素朴な善意の人、この素朴な善意がロータリーの奉仕の出発点であります。

<第二話>

昔、中国で二人の国王が出会った時、それぞれの国の自慢をした。一人の国王が、私の国には「怪寸十枚」、即ち直径一寸もある大きな宝玉が十個ある。これが私の国の宝です、と自慢した。ところが一方の国王は、私の国にはそんな宝玉は無いけれど、一隅を照らしている人間がたくさんいる。それが私の宝です、と応えたというのです。一隅を照らす人、というのはたとえどんな田舎でも、また、どんなつまらない小さな職業でもいい、人は知らなくとも、人から認められもせず、従って賞賛もされなくとも、黙々として自分の職域に自分の使命に邁進している人のことでもあります。一隅を照らず人が多ければ多いほど、その地域も国も立派になり、住み良くなるのであります。

それは一本の蠟燭の灯は小さくとも、その火は近づくたくさんの人々の心の蠟燭に火を灯すことができる。そして千本、万本と心の蠟燭に火が灯る時、その光は村を照らし国を照らすから、というのであります。

ロータリーは個人奉仕の絶対性を説いております。(決議23-34号)

<第三話>

あるスイスの田舎で、おばあさんがざるの中に羊の毛を入れて、きれいな谷の水に打たせておりました。そこへ牧師さんが通りかかりました。「おばあさん、あなたは日曜毎に教会へ来て、私の説教を聞いておられる。定めし、ええ話をたくさん覚えたろう」と聞きました。おばあさんは「ところが牧師さん、もう年だもの、覚えるそばからみな忘れてしまいます」「せっかく覚えたい話を忘れてしまうたら困るじゃないか」「でも牧師さん、この羊の毛を見てください。ざるの目からは水はどんどん逃げていきます。逃げていきますけれども、ご覧ください。羊の毛はこんなに綺麗になっております」こう返事したということです。

ロータリーの理想は高く、理念もまた、崇高なものでございます。我々はいつも教えられますけれども、聞かされるそばからみな忘れてしまいます。しかし、たとえ水が流れてしまっても必要なことは、このロータリーという水の中に自らの身体を侍ることであって、常にその中に

自分が浸ることあります。ロータリーそのものになりきることであるとするならば、やがては自分の身体も清らかになる。それがやがて周囲を明るくし、ひいては世界の平和に通ずる道ではなからうかと存じます。

<第四話>

小川正子は昭和4年東京女子医専を終えると、すぐ全生病院に光田院長を訪ねました。「私は先生のお仕事を尊敬しております。どうか病院で働かせてください」「小川さん、らい病の患者さんの治療は感傷や理想だけではできません。愛の心と冷厳な科学の力を必要とするのです。本当に貴方がらい病者の友となろうとなさるなら、もっと科学者として、医者として修行してからにしない」

正子は黙々と三年間修行し、昭和7年再度、瀬戸内海の小島、長島愛生園の光田院長を再度訪ね、喜んで迎えられた。病者の中には自分の食べかけの菓子を突きつけ「本当に俺たちのことを思っているなら、これを食べてくれ」などと嫌がらせをする者もいたが、彼女はこの病気の持つ半ば宿命的な業の深さに哀れみを寄せるのでした。

二年目にらい病者収容の出張を院長から命ぜられました。らい病者を救い、伝染病のこの忌むべき病を社会から根絶しようとの情熱に支えられての苦しい旅でした。

「先生、このまま死なせてくらっせよ」と哀願する老婆や、「おらの兄様はおらが診る」と家族総出で収容されまいとする家もあった。冷厳な医者であろうとする正子も、ともすれば感傷に引き入れられそうになった。「らいという不幸をこの世からなくすためには感傷に負けてはならない」収容した患者を愛生園まで運ぶのも大変な苦勞でした。トラックに載せ、起居を共にする旅は、気高き精神の持ち主として始め可能であった。こうした何回かの旅と園にあつての献身的努力は何時しか体力を超えていた。微熱と疲労、それが胸を侵しつつある病魔の故であると医師である彼女は知ってはいたが、決して休もうとはしなかった。彼女の身体を心配した光田院長が静養を命じたときはもう遅かった。郷里山梨県に帰った小川正子は再び立つことも無く、昭和18年4月、42歳の尊くも短い一生を終わった。(らい病に捧げた一生より)

まさに Serve Not To Self、自己否定の奉仕であります。ロータリーの奉仕の心は、全ての人たちの幸せを祈る心であります。ロータリアンは例会に出席するのが目的ではなく、例会に出席することによって、ロータリーのルールを学び、そしてロータリーの心を知る。これがロータリアンとしての第一歩であろうかと存じます。

<第五話> たて糸とよ糸

地域にロータリークラブができた意義を考えてみますと、ロータリーの願っていることは、豊かな人間関係によって、より良い社会を創ることでもあります。ここでいう豊かな人間関係とは「縦のつながり」と共に「横のつながり」が緊密に組み合っているという意味であります。

縦の人間関係とは、生活に直結した「つながり合い」であります。大企業と下請け業者、幹部と平社員、官僚と人民、先輩と後輩、親分と子分といった間柄であります。これらは競争社会に生き残るために大切なことでありま

す。

しかし、この縦の関係にのみ汲々としておきますと、業者は過当競争に陥って苦しみ、汚職のために政治は腐乱し、青年は社会に不信を抱き、不安に襲われて非行化し、暴力化してまいります。ここで所謂、人間疎外に走り、ついには「人を見たら泥棒と思え」といった相互不信に陥って、生きながらの地獄を見るようになってまいるのであります。

では、横の人間関係とは人間兄弟という観念であり、所謂「仲間意識」であります。人間は人それぞれの喜びと悲しみがあります。その喜びは共に喜ぶことによって倍加し、悲しみはこれを分かち合うことによって薄らぎます。

同じこの世に生を受けたものは、互いに相手の身になって考える。即ち「思いやりの気持ち」があつてこそ、この世は平和な楽園になります。この思いやりの精神を仏は「慈悲」といい、キリストは「愛」と呼び、孔子は「仁」と唱えました。ロータリーではこれを「奉仕の理想」と申します。

私は人間関係を織物の経糸と緯糸に譬えることができると思います。たて糸によこ糸を織り込んだ時、初めて「布」となって人の身体を暖かく包み、また美しい色彩や模様を織り成して生活を楽しくいたします。そして、糸の性質と織り込み方によって、涼しい「絹」にもなり、暖かい冬物にもなります。また、清潔な白布にもなり、豪華な金襴にもなるのであります。

ロータリアンは例会に出席するのが目的ではなく、例会に出席することによって、ロータリアンとしての参加を敢行しようというのであります。(認証場伝達式 前原勝樹)

<第6話> タイタニック号船長

4万5千トンの大客船タイタニック号がサザンプトンを出航して、紐育への処女航海に上がったのは、1912年4月10日の朝でした。

ところが北大西洋の真ん中で、タイタニック号は冰山と衝突し沈没した。付近を航海していたカルパチャ号は、タイタニックからの無電によって直ちに救助に向かった。

しかし、カルパチャ号が沈没した現場に着いたのは6時間後だった。2千人からの船客は、大部分が沈没の猛烈な水圧のために押し潰されたらしかつた。

カルパチャ号では全力を挙げて生き残っていた遭難者を救助した。浮標を身につけた赤ん坊を抱いている老人が、声高く「ここだ。ここだ」と叫んでいた。救命艇が近づくと、老人は赤ん坊を高く差し上げた。船員は赤ん坊を抱き取って、次にその老人を救い上げようとすると、彼は首を振った。そして浮標を自分の身体から解き放すと、「私はタイタニック号の船長だ。たくさんの人を死なしておいて、私一人助かるわけにはいかぬ。どうか、わしの変わりに他の人を助けてください。ではさようなら」と叫びながら、みるみるうちに海の中に姿を没してしまった。Service Not To Self 自己犠牲の奉仕であります。

<結び>

ロータリーの思想の根本には、宗教的な考えがありま

す。その宗教的発想をいかに職業倫理として練り直していったかというところにロータリーの意義があります。Service Above Selfにしても元は Service Not To Selfでした。本来は無我の奉仕でなければならぬものを、フレデリック・シェルが「超我の奉仕」と置き換えたところに、ロータリーの発想がありました。

しかし、宗教的無我というのは、決して我が無いということではありません。天地の愛情なのです。だから我が無いのです。母親の子供に注ぐ愛なんてものは、子供に仕えることが幸せなんです。幸せなんてものは、仕えることです。昔から「仕え合う」と書いて「しあわせ」と読みました。

ロータリーの奉仕も、ここに根本をおいて、私たちの運動は「幸せ」を社会にばら撒く運動でなければなりません。ロータリーは一業一会員制をもって良質な職業人が、例会において、他の異なった発想をもつ良質な所業人と切磋琢磨して、自己研鑽を遂げ、自分の足りないところを精神的に補って得た心の高まり(奉仕の心)をもって、ありとあらゆる社会生活に、豊かな人間関係を打ち立てることでもあります。

長い時間のご清聴、感謝いたします。

(文責 松崎 章夫会員)

<2013-2014年度 RIテーマ>



ロータリーを實踐し
みんなに豊かな人生を

第2389回例会

《懇親夜例会》

日時⇒ 平成25年1月25日(金) 点鐘18:00

場所⇒ ふぐ料理「生乃弥」

第2390回例会

《会員ミニ卓話》

日時⇒ 平成25年2月1日(金) 点鐘12:30

会場⇒ オークラ千葉ホテル

